

定年帰農者の直売参加を支援

～ 団塊パワーを地域農業の新たな担い手に！～

平田久士（農業経営課管理・肥料農薬取締グループ、
前・海部農林水産事務所農業改良普及課）

【平成22年5月27日掲載】

【要約】

近年、多くの団塊世代が定年退職を迎えるが、この中には農地を保有し、まだまだ働く意欲も体力もあり、農業に興味を持っている者（以下「定年帰農者」という。）が多く見られる。

農業改良普及課では、地域農業の新たな担い手として、定年帰農者が地域の生産組織に加入・定着できるよう「売れる野菜づくり講座」を開催した。

結果、平成21年度は9名が農産物の直売に意欲を示すようになった。

1 はじめに

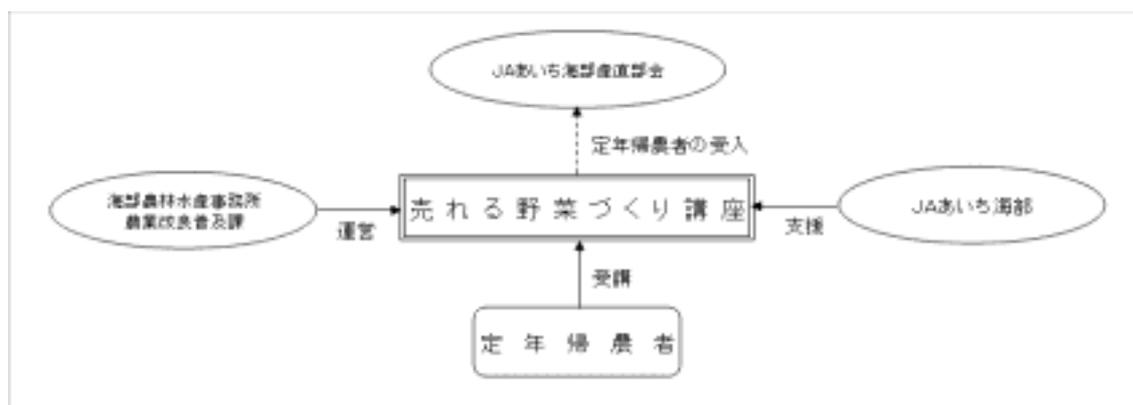
地域農業・農村においては、担い手の不足や農業者の高齢化の進行に伴い遊休農地の増加などの課題が顕在化している。

こうした中、今後定年を迎える団塊の世代の中には、働く意欲も体力もあり、なおかつ農業に関心がある者も多い。

農業改良普及課が、定年帰農者を地域農業・農村の担い手として育成するために取り組んだ「売れる野菜づくり講座」について紹介する。

2 関係機関との連携

定年帰農者が地域農業・農村の担い手となるためには、まず地域の農産物直売所での販売ができることが必要である。そこで栽培技術を習得し、円滑に地域の生産組織に加入、定着できるよう地域の農協及び農協が運営する直売組織と連携を図りながら取り組んだ（第1図）。



第1図 関係機関との連携概念図

3 講師の選定とカリキュラムの作成

講師は、野菜の技術を熟知している普及指導員のOBに、実習ほ場の準備は農協に協力を依頼した。農協、講師、農業改良普及課の三者が連携しながら年間の実習カリキュラムを作成した。

直売所で販売するためには、年間を通して多種多様な農産物を生産することが肝要である。そのため、講座のカリキュラムでは、7作目10品種の栽培に取り組んだ。加えて、円滑に栽培に取り組めるよう、座学ではなくほ場での実習を中心にし、作業も栽培管理の中で特に重要なものを選定した。

また、受講生が講座の中で栽培した野菜を自分たちで販売する実習を農協の直売所の店頭で実施した。

講座は4月から1月の間に月に1回から2回、計13回開催した。カリキュラムでは、春野菜としてスイカ・インゲン・ナス・ネギを、秋冬野菜としてカリフラワー、ハクサイ、ネギ、サラダゴボウを取り上げた。

4 受講生の募集

受講生は、前年度に農協が主催した農業塾を受講した者、又は農業改良普及課主催の講座を受講し、ある程度栽培に関する基礎知識がある者を対象に募集し、20名が集まった。

5 講座の実施結果とこれからの課題

毎回、受講生の8割程度が参加し、意欲の高さがうかがえた。ほ場での実習（写真1, 2）では、受講生から「実際の作業をしながら話を聞けたので非常に参考になった。」「講座で学んだことを自分のほ場でも活かしている。」「などの意見が多く聞かれた。また、販売実習（写真3）では、「消費者がどんなものを求めているか直接聞いて参考になった。」「売れる野菜を決められた時期に出荷する難しさを実感した。」等の意見が聞かれた。



写真1 春夏野菜の実習

結果的に、受講生のうち9名が直売に取り組む意欲を示した。また、その他の受講生からも「次年度以降の栽培に講座で得た知識を役立てたい。」など、講座を評価する声が聞かれた。

今後は、関係機関と連携を強化しながら、さらなる栽培技術のレベルアップと直売に意欲を示した定年帰農者を円滑に地域の直売組織に加入できるよう誘導していくことが課題である。



写真2 秋冬野菜の実習



写真3 販売実習